平成 16 年度

新機軸授業報告書

愛媛大学教育開発センター

目次

主題別特講講義科目(地域)
愛媛の歴史とひとびと・・・

科目名：愛媛の歴史とひとびと　　*授業形態：主題別特薦講義科目(地域)*
担当教員：内田九州男(法文学部)
受講者数：９７名

一　授業題目　　愛媛の歴史
一　履修者数　　９７名
一　重視した教育目的　愛媛の歴史を身近な遺跡等と関連づけて理解する。
一　設定した到達レベル　初心者レベル（他県および松山市以外の出身者を前提にした）
一　授業を進めるにあたって特に留意した事柄

①授業内容をビジュアルに構成する。

教室での講義は毎回パワーポイントを使ってスクリーンに映し出して行った。レジュメは、映像と同じものを配布資料としてプリントし、書き込みを可能とするようにした。

②最も新しい研究成果をわかりやすく知らせる。

この点では、城郭史（湯築城、松山城、河後森城等）、遍路に重点を置いた。

③踏査活動を実施し、歴史を身近に感じる臨場感のある授業とする。

講義で取り上げた学外の史跡・話題の地・博物館を歩く踏査活動を３回計画し、実施した。

○１回目は湯築城資料館。資料館での展示見学と湯築城跡の見学。ボランティアガイドによって現地の詳細な説明を受けた。

○２回目は松山城の踏査。普段は行かない、黒門口から二の丸庭園、そして城道を歩いての本丸への登城、さらに本丸東側の石垣と刻印見学、また全国的にも珍しい登り石垣の見学と、観光ガイドとは相当ちがった角度からの見学とした。

○３回目は道後温泉本館周辺と子規記念博物館の見学。博物館では、インストラクチャーの詳しい説明を受け、子規の生涯と漱石との交流などについての知識を得た。また道後では、湯神社・お菓子神社を見、さらに宝厳寺、ネオン坂の遊郭について簡略な説明を行った。

④質問に丁寧に答え、講義内容をふくらませる。

毎回ではなかったが、多くの授業で質問を受け付け（記載スペースのある出席カードを利用）、それを整理して次回かその次に答えるようにした。講義では触れなかった様々な問題を追加することができ、授業内容が大きくふくらんだ。このため遍路の授業回数は１回多くなった。

一　学生の反応

愛媛の歴史がよく判ったと好評であった。そのためか、レポート課題を発表した後の授業、またレポート締め切り後の補講にも意外な程多くの学生が出席した。

一　総合判断

授業全体はうまくいったと判断している。

一　改善点

パワーポイントのすべての映像を配付資料に盛り込んだため、文字が小さくなり、この点は苦情も出た。改善点の第一である。第二は配布資料が詳細だったため、授業の中でのテキストの活用が十分でなかった。持ち込みのパソコンの接続が悪かったり、大学のパソコンの作動が十分でなかった（設定があわない）回があり、問題点と判断した。

科目名：環境問題の諸相	*授業形態：主題別特薦講義科目(環境)*
担当教員：栗田英幸(法文学部)	
受講者数：１７名	

環境問題の諸相「環境ＮＰＯって何だろう」所感

本講義「環境 NPO って何だろう？」は、従来の講義での以下のような限界を克服する目的で行ったものである。

まず、従来の講義の一般的な特徴として、大学教員による、学内もしくは教室内に止まった講義であることを挙げることができる。このような講義は、学生に学ぶ目的を積極的に指し示すこと、社会問題という複雑な問題について多角的な視点、特に学問の領域からはみ出す視点を提供することに大きな限界がある。企業の従業員としてだけでなく、より広い社会的貢献の可能な人材の育成が大学の役割として重要視されてきている現在において、こうした限界を克服することは大学の急務と言って良い。

その一方で、学外、特に NGO、NPO が、大学教育に対して積極的に関わるようになってきており、他大学、特に私学において、実際に彼ら・彼女らを非常勤講師として招き入れた市民参画型の講義が展開されている。これは、上述のような限界を克服する上で大きな効果を有するものであるのみならず、海外で大きな評価を受けている NPO の用いる開発教育の手法は、特に社会問題を自分の問題として捉える上で大きな教育効果を有している。また、四国、もしくは愛媛県でも少なくない NPO、NGO が大学教育の場で共に教育を担うことに興味を持つようになってきている。

本講義では、松山で活躍する 3 人の NPO ワーカーに非常勤講師を依頼し、2 回ずつ講義を受け持ってもらった。1 回目は NPO の手法を用いて活動内容について参加型の講義を行ってもらい、2 回目では、NPO ワーカー自身の大学生活や NPO として働くようになった理由、そして大学で学んだこととの接点について話してもらった。

受講者人数は 20 人強、最終的には 20 人弱の学生が残ることとなった。工学部、理学部の学生が主であったことから、社会科学的な視点に最初はとまどっていたようであったが、グループワークを工夫したことで、講義の半ばくらいには学生たちも、グループワークを積極的に、そして楽しみながらこなせるようになってきたように感じる。工夫した点としては、今年度から導入されたアカデミックボランティアとしてゼミ生 2 人に議論盛り上げ役として、そして時には開発教育のファシリテーターとして参加してもらった。このことによりグループの雰囲気や学生の参加姿勢等へも細かい心配りができるようになった。余談になるが、ゼミ生がこれ程までに講義を支えることができたのは、彼女らがこれまで NPO との関わりの中でさまざまな実践的な教育手法およびファシリテーション能力を身につけていたからに他ならず、学外との交流が、このような副次的な、しかし大きな教育効果を与える事例として大いに評価できるものであることは間違いない。

NPO の話は、自然体験、国際協力、ゴミ・資源問題と多岐にわたり、それぞれの問題を深めるという点ではあまりにも時間的な制限があったと言わざるを得ない。しかし、ともすれば誤解しがちな NPO の役割や仕事内容、そして何よりも身近な問題、自分でもコミットできる問題としての問題把握においては、大きな効果があったものと思う。最後には学生自らＮＰＯの活動に参加し、その活動内容や意義について調べることを義務づけたが、多くのレポートの中で、講義当初よりも環境問題や自分との距離についての認識において大きな前進が見られる。また、学生の参加を受けたＮＰＯのいくつかからも喜びの声が私の手元に届いている。

上記のような教育方法は、受講学生の教育以外にもいくつもの効果がある。その最大のものは、大学教員である私自身が、NPO との対話や講義から社会の要求を学べる点であろう。このような感性がこれからの大学にとってますます重要になってくる点は今更言うまでもない。第 2 は、アカデミックボランティアとして参加してくれたゼミ生への教育効果であり、私や NPO と一緒になって講義の内容や学生の反応、その対処を話し合い、講義を

つくり出していく経験は、卒業後、積極的に社会貢献を行っていける能力を育成するのに大きな効果を発揮する。更に、NPO と大学との連携を深めることから、大学の社会貢献の幅に広がりが出ると同時に、大学の存在意義を積極的にアピールすることにもつながる。実際、この講義の試みは、大学（詳しくは私の所属する法文学部比較経済システム講座の主催する比較経済研究会）とＮＰＯとの共催でのシンポジウムの開催へと結びついており、11 月の「四国 NGO ネットワーク協議会シンポジウム：地域発、国際協力」では、愛媛県知事をはじめ、学内外から多くの参加者を集めた。また、この 3 月（2005 年）には、文科省、環境省、外務省の肝いりで作られた「持続可能な開発のための教育の 10 年」との関わりで、シンポジウムを開催する。今回の講義を含めたこれら一連の試みは、NPO を通して四国のみならず全国へも発信されており、高い評価を得ている。また、来年度からは法文学部の専門教育の場に移し、国際協力ＮＧＯとの協力で「地域発、国際協力論」を開始する予定である。

かなり大きな効果を実感できた本講義ではあるが、課題も少なからず存在する。私自身の落ち度でもあるが、当初、受講生として最大 150 人程度はとるようにと事務から要望されていた。しかし、人気講義と重複してしまったこと、法文学部や農学部といった私の講義内容と相性の高い学生にとって受講しづらい時間帯にしてしまったことから、受講人数は大幅に減ってしまった。この点に関しては、カリキュラムでの優遇措置およびシラバス以外にも特薦講義としてアピールする場があれば、ある程度は解消されるのではないかと思う。

もう 1 点は、非常勤講師およびアカデミックボランティアについてである。従来のＴＡや非常勤講師の制度では、教員以外の講義への公式的な参加を依頼するのに、謝金や講師料支払いを伴わなければならない一方、このための予算は削減対象となっている。しかし、例えばアカデミックボランティアのように、謝金は出ずとも公式に大学から認められ、履歴書にも書けるような肩書きが与えられるならば、少なくない学生にとって大きなインセンティブとなる（非常に残念なことに、このアカデミックボランティア制度が事務に上手く伝わっておらず、学生の 1 人が登録の手続きでたらい回しにされて登録できなかった）。これは学外の人間も同様であり、講師料を支払わずとも（もちろん、支払えるのであればそれに越したことはないが）、非常勤講師という肩書きを提供することにより、より積極的に外部の人間を講義に導入することが可能となる。更に、このような制度が導入できるのであれば、大学とＮＰＯとの協働講義として助成金を得られる可能性もでき、そこから講師料や交通費を賄うこともできる。

地域、そして大学を活性化させるには、学生もしくは卒業生を社会との触媒としていかに上手く育て、位置づけるかにかかっている。そのためには、研究成果や教育を受ける場だけでなく、教育を提供する場をも積極的に開かれたものとする必要があるのではないだろうか。このような視点から見るならば、本講義は、大学の具体的な可能性を少なからず示す上でも評価できるものと考えている。

科目名：地球と環境　　*授業形態：主題別特薦講義科目(環境)*
担当教員：武岡英隆、井内美郎、鈴木　聡、田辺信介（沿岸環境科学研究センター）
受講者数：１１３名

授業題目：海と地球環境

本授業は、愛媛大学の理念である「地域、環境、生命」を主題とした授業の一つとして、沿岸環境科学研究センター所属教員が担当したもので、新機軸授業の一環として位置づけられている。

授業の題目は、同センターの専門とする研究分野を生かしながらも一般的で広く興味を

引くことをねらい、「海と地球環境」とした。「地域、環境、生命」という３つの主題は、いずれも何らかの形でこの授業に網羅されるようにした。また、専門の異なる４人の担当部分に、極力全体としてのストーリー性を持たせることも工夫した点である。

授業のアンケート評価はほぼ平均点であったが、学生のコメントを見る限りでは概ね好評であったようである。一般的に、オムニバス授業は学生の評価が下がることが多いように思われるが、アンケートでは「２，３回ごとにテーマが変わって違う先生になるので面白かった」との意見もあった。体系化された内容をきちんと教える必要のある専門科目と違い、幅広い知識を与えることをねらった本授業のような科目では、オムニバス形式も支持されるということであろう。ただし、このように一定の評価は得たとはいえ、これが新機軸授業としての評価であるかどうかは不明である。この授業が新機軸授業であるとの意識が、学生側にどの程度あったかわからないからである。授業の主題そのものは従来の授業になかったわけではないので、この授業の新しさといえば、専門性の異なるいくつかの環境分野の内容をコンパクトにまとめたという点ぐらいでしかないであろう。企画委員会からは、この授業を「愛媛大学を代表する研究センターの授業科目」として位置づけたい、と伺っていたが、専門的になり過ぎることを避けるため、センターのカラーは余り強く出さなかった。したがって、もし学生から、どの辺りが新機軸授業であるかと問われたら、明確には答えられそうもない。本授業は次年度も開講されることになっているが、引き続き新機軸授業として取り扱われるなら、企画委員会と担当者の間で授業のねらいについてもう少し摺り合わせを行う必要があると思われる。一方でスーパーサイエンスコースの発足を機に、３センター教員の合同による新しい授業も始まることになっているが、この授業との内容調整も必要であろう。

科目名：ひとの生き方・考え方の変遷　*授業形態：主題別特薦講義科目(生命)*
担当教員：山本万喜雄（教育学部）
受講者数：２８４名

「授業通信」 による対話の教育

「ひとの生き方・考え方の変遷」の授業テーマ

1「ひとの生き方・考え方の変遷」を学ぶにあたって
　　①　いのちとくらしと生き方と
2　学ぶ意義　②　病むことも人間を育てる
3　　③　健康なときに健康の価値に気づく
4「アトピー」を観て　　いのちの守りあい
5　健康の権利と連帯性
6　信じて疑え　　批判なくして進歩なし　社会連帯なくして健康なし
7　検定教科書にみる「公害」観　公共性と自己責任論を考える
8　不注意論の克服　　①　模擬授業「労働災害」
9　不注意論の克服　　②　安全性の考え方・交通安全標語の分析
10　性と生を考える①
11　性と生を考える②「恋愛不安」と自己決定力
12「地球が動いた日」を観て　　阪神・淡路大震災から 10 年
13「With・・・」を観て　　志をもって
14　ともに生きる　　生きがいとボランティア・文化活動
15　健康観の変遷　　そして授業の総括
評価　　課題ﾚﾎﾟｰﾄ 2 編提出

否定的にとらえがちな面に、肯定的な光をあてて生かすことが、人間尊厳に根ざす多様な個性を認めあう生き方の思想を編みだすのではないか。そのように考える私は、授業の感想文を重視した大学における教育実践を重ねてきた。

本報は、200 人を超える多人数講義におけるコミュニケーションの試み、とりわけ「授業通信」による対話の教育について報告するものである。

【感想文の書き方・読み方・返し方】

私にとって授業の感想文は、教育実践の鏡であり、なによりの評価である。授業の終了前の 10 分程度をとって、授業のひとことを求める方法は、自らの成長にとても大きな役割を果たしている。書くことは考えること。自分のことばで、白分の問題として、自分の発想で書かれたものがたくさん出てくれば、たとえそれがその学生の歪みであったとしても、良い感想になるのではないかと考える。教師は事前に、その意図および感想文の読み方・返し方を十分理解してもらうことが大切である。また学生自身、短時間で感想をまとめる力の獲得が可能になるように、訓練しつつ教えることが必要になってくる。

次に感想文を返す方法であるが、それには二つある。まず、感想文のいくつかを選び出し、その日の授業の全体がわかるように編集し、印刷したプリント（B４）を次の授業のはじめに全員に返す方法。もう一つの方法は、一人ひとりの感想文を期末にとじて返す。前者は他者からの学びあいができると支持され、後者は自らの生活を見つめる上で資料となると喜ばれている。ただ多人数講義の場合、この感想文の分析・総合の作業は、かなり時間を要する。それだけに、その日のうちにやってしまうことが、永続きのコツだと思う。最近では、学生の措いたイラストも生かしながら、楽しくアピールする通信にするよう心がけている。

以上のような授業改善を１９７４年以来、地道に、ゆったり、繰り返してきた。聞くところによれば、学生たちはプリントの束を丁寧に保存し、中には学級通信や家族新聞に生かしている者もいるという。苦労が報われる思いである。

【授業通信】

科目名：生活習慣と健康　　*授業形態：主題別特薦講義科目(生命)*
担当教員：重松　裕二(医学部)
受講者数：１８１名

1. 授業題目
(1)『授業ガイダンス』　第二内科　重松　裕二　助教授
(2)『生活習慣病を疫学的見地から検討する』　公衆衛生学　小西　正光　教授
(3)『生活習慣と健康』　第二内科　檜垣　實男　教授
(4)『生活習慣と感染症の関係』　免疫学・感染病態学　四宮　博人　助教授
(5)『生活習慣病を遺伝的側面から考える』　衛生学　近藤　郁子　教授
(6)『生活習慣病として重要な糖尿病について』　臨床検査医学　牧野　英一　教授
(7)『タバコと肺疾患』　第二内科　濱田　泰伸　助手
(8)『生活習慣病：高血圧と動脈硬化の関係』　老年医学　小原　克彦　助教授
(9)『食生活と健康』　第三内科　南　尚佳　助手
(10)『健康観について考える』　看護学科　大西　美智恵　助教授
(11)『生活習慣と腎臓疾患』　第二内科　福岡　富和　助手
(12)『咀嚼と健康』　歯科口腔外科　新谷　悟　助教授
(13)『生活習慣と眼の病気の関係について』　眼科　島村　一郎　助手
(14)『生活習慣病としての心臓病』第二内科　重松　裕二　助教授
(15)『試験』　第二内科　重松　裕二　助教授

2. 履修者数
試験を受けた者が 162 名。

3. 重視した教育目的
今後、社会人として生活して行く時、自分自身の健康管理に必要な一般的な知識を身につけさせることに重点を起き、授業を進めた。

4. 設定した到達レベル
自分で自分の健康管理ができる程度の一般的な知識の習得。

5. 授業を進めるにあたって特に留意したこと
専門知識の紹介をするのではなく、あくまで自身の健康管理に必要な一般的な知識の紹介に努めた。

6. 学生の反応
かなり真剣に授業を受けていたと思う。

7. 今後に向けた改善点
多くの授業がパソコンを用いているので、授業内容を配付資料として配ってほしいという要望があった。今後は配付資料の作成を考えたい。

8. 愛媛大学の学生に学ばせたい教育テーマ
『生活習慣病の基礎と予防の実践』

科目名：哲学への招待 *授業形態：主題別セミナー*
担当教員：松本長彦(法文学部)
受講者数：１６名

授業題目：哲学的に考える、あるいは哲学する

この授業は、「自由」「存在」「認識」という哲学に於ける最も基本的なテーマを、ディスカッション形式を通して考えてもらいたいということを、予めシラバスで告知した上で、少人数授業として実施した。幸い、希望した受講生が 23 人にとどまったので、特に人数調整をする必要は生じなかった。

授業は、最初の２回は、ガイダンスを兼ねて、哲学という学問についてごく入門的な講義を行い、３回目からディスカッション形式の授業を行った。ほぼランダムに学生を４～５人のグループに班分けし（テーマごとに班は組み替えた）、机を移動して島を作って、授業時間の２回分（３回分になったテーマもあるが）を、班単位のグループディスカッションの時間に充てた。班単位で意見を集約させて、簡単なレジュメ（Ａ４判１枚）を作成してもらい、それを共通教育係のレポートボックスに提出させ、すべての班のレジュメを集めたものを共通教育係に授業資料として印刷してもらって、学生全員に配布した。そして、その資料をもとに、クラス全員でディスカッションを行った。全体でのディスカッションの際も、やはり机を移動させて、できるだけ学生同士が対面できる形にし、まずは班単位で趣旨説明や補足説明をし、それに対して他の班の学生が質問するという形をとった。その上で、自由に発言させて、議論を深めていくという形で、上記の３テーマについてのディスカッションを行った。

成績評価は、各班で作成したレジュメ及び授業中の各学生の発言等に対する平常点と、上記テーマのいずれかについての期末レポートの内容とで、総合的に行った。

本授業で重視した「教育目的」は、哲学的に考える習慣を身に付けることである。ディスカッション形式の授業の中で、哲学に於ける基本的問題を考えることを通して、学生諸君が、哲学的な思索に少しでも馴染み、哲学的に物事を見たり考えたりする習慣を身につけてもらいたいという意図で、このような授業を企画した。

設定した「到達レベル」は、哲学的問題について、客観性を持って考え、自らの意見を表明することができることである。人前で自分の意見を筋道立てて表明することは難しい。ましてや、普段考えたこともないような哲学的問題について、いきなりそのようなことができる学生は、皆無であろう。そのために、あえて、このようなテーマを課題として与え、他の学生と意見交換しながら、自分の考えを練り上げていってもらいたい。その上で、それを表現できるようにしてほしい、というのがこの授業のねらいであった。

「授業を進めるにあたって特に留意した事柄」は、できるだけ自由な雰囲気の中で、学生一人一人に自分の意見を表明する機会を保証することであった。そのために少人数のグループディスカッション形式を取り入れたし、全体討論においても、必要があれば学生に発言を促して、できるだけ意見を表明させた。

「学生の反応」としては、授業中から少し気になっており、できるだけ解消するよう努力したつもりではあるが、学生によって授業への取り組み具合（所謂積極性）にバラツキがあり、それに応じて、授業に対する評価も肯定的なものと否定的なものが、結構分かれる、という結果が出た。興味を持って積極的に議論に参加する学生（残念なことに、これが多数派とはなっていない）には、かなり面白かったようであるが、受動的な受講態度から抜け出せない、あるいは積極的に、もしくは上手く自分の意見を表明できなかった学生にとっては、さほどの充実感も達成感も得られなかったようである。

「総合的にみてうまくいったかどうか」と問われれば、今回の授業は失敗であったと自己評価せざるを得ない。その原因としては、まずは教員自身の資質・性格による指導力不足が第一であろう。クラスのアイスブレーキングが十分にできていないままに、自由に討論させようとした点に無理があった。もう一つの問題としては、少人数のグルー

プの中で、議論のイニシアチブをとる学生がいる場合に、学年の違いなどで、自由に意見を表明できなくなる学生がいたようである。また、意見を集約する作業の中で、まじめに仕事をこなす学生とそうでない学生とがいて、まじめな学生の不満が募るということもあったようである。これらについてのケアが十分にできたとは言い難いことも、失敗の原因としてあげられる。さらに、授業評価アンケートの記述も参考にすると、学生諸君にとっては、テーマがあまりにも抽象的で難しすぎたということもあげられる。「もう少し教えてほしい」という意見があったことを考え合わせれば、予備知識無しで（むしろそれを狙ったのであるが）これをやらせるのは、今の大学生にはやはり難しいのであろうか。

「今後に向けた改善点」としては、一つには、クラスを自由に発言できる雰囲気にするアイスブレーキングの仕方を考えること（といっても、小学生相手にやるようなことには、どうしても抵抗があるのだが・・・）。グループディスカッションの仕方を、学生たちの自由な意見表明を妨げないようにしながら、何らかの形でコントロールすること（これに関しては、どうすればいいのか、アイデアはない）。さらに、もう少し身近なテーマを設定して、そこから抽象的なテーマに議論を発展させられるような授業展開を工夫すること。このようなことが考えられる。

「愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ」としては、伝統的な学問体系に則った、基本的かつ学問的なものの見方・考え方（当然その中には基本的「知識」が含まれる）を挙げたい。結局のところ、そのような基本的な教養こそが、社会に出た時に様々な形で役に立つのだと思う。

科目名：こころの発達 *授業形態：主題別セミナー*
担当教員：佐藤公代(教育学部)
受講者数：２９名

大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（６）ー批判的思考形成に及ぼす集団討議学習の役割ー

（問題と目的）

佐藤（２００１，２００４a、b、c）は、「大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（１）～（４）」において、カリキュラム、指導教官決定要因、ゼミ授業に対する学生の反応、ゼミに対する教員と学生のズレについて考えてきた。今回は、共通教育における批判的思考形成の授業について考察してみる。

仮説は次の通りである。

（１）グループ学習を楽しく感じ、効果も見られるだろう。

（２）テーマの設定を色々に変えても、グループごとに毎回同じようにした方が統一が取れて良いだろう。

（方法）

１）調査時期：２００４年7月２３日（金）２）対象者：E大学共通教育受講者２６人（３０人以下という人数制限を設けたため）３）手続き：自作のアンケート用紙に無記名で記入してもらう。レポート課題から学生の批判的思考過程をさぐる。

４）講義の内容：まず最初は、科学的心理学とは何かについて講義し、その後、「ヒルガードの心理学」から学生に興味のある課題を選ばせて、集団討議をさせる。その場合、プ

リントに書かれてある肯定、否定の考え方についての内容を読ませ、それに対して、学生に説明する。その後、グループごとに討論させ、グループのまとめ意見を全員の前でリーダーに発表させる。発表するリーダーは、毎回変わる。各グループ毎のまとめ発表後、筆者が各グループにコメントをはさみ、最後にまとめをして締めくくった。

（結果と考察）

自作のアンケートの結果から述べる。

１．人数制限にテストをすることについて

表１から、「非常に良い」と「良い」をあわせて９人（３６％）、「わからない」が１０人（４０％）、「悪い」と「非常に悪い」をあわせて６人（２４％）である。この結果から、学生にとっては、どちらともいえないのであろう。筆者の意図としては、テストをするということで、本当に受講したい学生が集まるだろうということと、質的に高い者を選ぶということであった。しかし、ふたをあけてみたら、３０人をきっていたという結果であった。テスト問題をもっていったので、テストを行って学生の様子を把握した。

２．グループの人数について

表２から、「５人ずつが適当である」が２０人（８０％）と多かった。５人ずつのグループが４つ、６人のグループが１つという事で授業開始したことは、学生にとってやりやすかったのであろう。

３．グループの固定化について

表３から、「固定した方が良い」は１３人（５４％）、「固定しない方が良い」は１１人（４６％）で、優劣はないようである。グループの関わり方において、各自がどのような役割を演じるかによって、どちらかに決まるのであろう。

４．テーマの決定について

表４から、「色々なテーマの方が良い」は２０人（８３％）で、「一つに決まっていた方が良い」の４人（１７％）よりは、多かった。これは、各自の興味の持ち方が色々であるので、色々な方面から議論したかったのであろう。また、一つのことを深く議論することに慣れていなかったのかも知れない。「科学的心理学」の裾のを広げる意味では、共通教育の理念にかなっているのかも知れない。しかし、批判的思考形成には不向きなのかも知れない。

５．テーマのグループ決定について

表５から、「各グループの自主性に任せた方が良い」は、２２人（８８％）で、「全グループとも同じ方が良い」の３人（１２％）よりは多かった。ここでも、各グループの興味の持ち方が如何にばらばらであるかを物語っているのであろう。肝心の批判的思考形成がなされるのであれば、どの形態であっても良いのかも知れない。しかし、授業をまとめるという点ではやりにくいことである。

６．グループ学習の評価について

表６から、「非常に良い」８人（３２％）と「良い」１３人（５２％）をあわせて、２１人（８４％）の学生が、グループ学習を良いと認めている。グループの質をどのように良くしていくかを考えながら、グループ構成をしていかないと議論にならず、ただ騒いでいるだけと言うことになってしまう。そこの見極めをどのようにしていくかの一つとして、リーダーの問題も考える。

７．議論が深まるためには、ということについて

表７から、「リーダーは誰でもなるものである」は１８人（７２％）で、「リーダーの存在が必要である」の７人（２８％）より多かった。これは、みんなが主人公になってグループを盛り上げ、主体的な行動をねらったものである。一人のリーダーに引っ張られてすすめられるものではなく、各自が能動的に活動することである。

８．遅刻者対策として

グループ学習となると、全員ができるだけそろった方がやりやすいだろうという配慮のもとに授業展開をしたかったのであるが、１時限目ということもあって、遅刻者が目立った。そこで、遅刻者を減らす方法を学生はどのように考えているのかを探ってみることに

した。
　表８から、「先生が叱るべきである」３人（１３％）＜「いつもの遅刻者はこの授業だけではない」４人（１７％）＜「それなりの理由があるのだから見逃してほしい」７人（３０％）＜「「グループのメンバー同士で叱るべきである」９人（３９％）と多くなっている。このことから、先生に頼らず、自分たちで何とかしようという意気込みは感じられる。しかし、見逃してほしいということに対しては、甘えがあるのであろう。筆者は、時間や締め切りの期日に関して厳しい面を持っているが、遅刻者に対して叱ったりはしない。なぜなら、大学生にもなって、遅刻することは悪い行為だとわかっているはずだし、わかっていながらもしてしまうというのは、何らかの理由があるのだろう。みんなの前で叱られるというのはプライドを傷つけられることだろう。叱らなくとも遅刻をしてはいけない意識をもたせることであるし、それが自分の成績や評価につながるという外発的動機づけから内発的動機づけに内面化する機会をえることでもある。
９．今後、面白いテーマを見つけて議論したいかどうかについて
　学習転移が起こっているかどうかを見るために回答させた項目である。
　表９から、「メンバー同士議論したい」は２０人（８０％）で、「メンバー同士議論したくない」の５人（２０％）より多かった。ということは、各グループの成員同士の結びつきが強く、議論する事に慣れが生じてきたのかも知れない。批判的思考形成の芽生えだけでも生じてくれれば、今回の授業は、まずまずといったところである。
１０．１５回（まとめと講義も入れて）の授業について
　表１０から、「非常に楽しかった」８人（３２％）と「楽しかった」１４人（５６％）をあわせて、２２人（８８％）の学生が楽しんでいた。確かに、観察していてもそれは、頷けることであった。しかし、「つまらない」２人（８％）、「わからない」１人（４％）がいるということは、教育のプロ資格がないということなので、なぜなのか、どうしたらなくせるのかについて詳細な分析が必要であろう。このような授業をする機会があったら、教育のプロ資格を得られるよう緻密な計画を立てなければならない。幸か不幸か、２００５年度の共通教育では、授業依頼がなく、自分からも申し込まなかったので、２００５年度の８月上旬の「教育心理学特講」の集中講義において、「生涯発達心理学」の授業で、３０人以下だったら考えてみようと思っている。
１１．各グループにおける出席状況について　表１１における１班～５班について述べる。各班毎に好きな班名を作らせ、それぞれ、その名前で言わせていたのである。本論を書く段になって、それぞれの名前を入れると、どの班かわかってしまうので、あえて、機械的に数字で示したのである。法文学部、教育学部、工学部の学生が入り交じっており、班構成の際は、学生の自主性に任せた。
　表１１から、合計して、１００％の出席率というのはなくて、どこかの班の誰かが必ず休んでいるのである。６月は中だるみになるのか、７３％（６／１１）、７７％（６／２５）の出席率と悪くなっている。
　次に、各自のレポートを採点してみると、それなりにグループ学習の軌跡がみられ、徐々に変化していくプロセスも読み取れた。レポート掲載について、学生の了解確認を忘れてしまったので、今回は見送ることにする。その点で、客観性の問題が残る。
　以上から、仮説（１）（２）について支持されたとしておく。今後、詳細な研究計画を立てて実証していかなければならない。今回は、研究のスタートに立ったものとしての価値は見いだせるだろう。

（引用文献）

　佐藤公代　内田伸子　２００１　大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（１）ー集中講義の授業評価による教授・学習過程の検討ー　愛媛大学教育学部紀要第１部　教育科学　第４７巻　第２号　１－２０
　佐藤公代　酒井千尋　２００４(a)　大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（２）ー教育心理のカリキュラムに関する検討ー　愛媛大学教育学部紀要　第１部　教育科学　第５０巻　第２号　５３－６１

佐藤公代　２００４(b)　大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（３）ー指導教官決定要因の検討ー　愛媛大学教育学部　第１部　教育科学　第５０巻　第２号　６３－６７
佐藤公代　２００４(c)　大学教育における教授・学習過程と学生の発達過程の関連（４）ー「心理学文献講読」のゼミに対する学生の行動についてー　愛媛大学教育学部紀要　第１部　教育科学　第５０巻　第２号　６９－７２

（注）受講生の皆様、有り難うございました。

科目名：現代の法律問題　　*授業形態：主題別セミナー*
担当教員：楢林建司(法文学部)
受講者数：３６名

ワークショップ型授業の試み

私は、平成１６年度前学期に「現代の法律問題」という科目名の授業を、「難民問題についてのワークショップ」という題目の下で行った。この授業は、新機軸科目の「主題別セミナー」の１つに位置づけられ留者である。受講者数は、３６名に限定した。詳しくは、『大学教育実践ジャーナル』掲載の別稿（佐藤浩章氏と共著）に譲るが、本報告においては、ワークショップ（以下ＷＳ）という手法に的を絞って若干の思いを紹介してみたい。

まず、「なぜＷＳなのか」ということである。これには、３つの理由がある。

第１に、私自身のＦＤに関するＷＳなどの経験から、この方式が参加者の参加意識を促進し、連帯感、自主性を育むうえで非常に有益だと実感しているからである。

第２に、授業の目的が、難民問題を素材としつつ「弱者」とされる人々と対等な人間関係を結ぶための基本的能力を身につけるというものだったので、そうした目的を達成するためには、授業において人間関係の構築を実践させることが不可欠だと考えたからである。

第３に、学部のゼミなどの経験により、授業をより楽しく有意義なものにしてゆくためには、学生の力を引き出すことが近道だと実感しているからである。授業作りにつき凡庸な能力しか有しない私にとって、一人だけであれこれ試みるよりも、学生の力を借りて授業を構成してゆく方が、「楽をして効果が大きい」のである。

こうしたＷＳ形式の授業を進めるにあたり、最も気をつけたことは、初対面の者同士（教員と受講生、受講生相互）にある緊張感を解きほぐし、教員を含む全ての授業参加者の間に気楽な意思疎通が可能となるようにすることであった。つまり、広い意味でのアイスブレーキング（氷解）である。

アイスブレーキングの種々の方法については、特にここで紹介するまでもなかろうが、私が「かなり効果あり」と感じたのは、担当者が設定したテーマについて、議論がはかどっていないように見えるグループに対して、「議論が進みにくいのは、担当教員と受講生の間に問題意識等の溝があるからで、その溝を協力して埋めよう」という立場から介入したことである。

授業において、こちらが期待しているような意見や質問が出ないことは、決して珍しいことではないだろう。そうした際に、「学生の問題意識や参加姿勢が不十分である」という立場から対応するのは、私の個人的な体験に照らせば、多くの場合、逆効果であり、また、授業がうまく行かない責任を学生のみに押しつけるものであると考える。そうではなくて、「円滑で有意義なコミュニケーションをいかにして実現するのか、共に考えよう」という視点から、少しずつでも学生の積極性を促そうとする方が効果的である。

なお、この授業を実施してゆくうえで、「教育開発センター」（旧「大学教育総合センター」）のスタッフには、授業参観をはじめとする各種コンサルティングでたいへんお世

話になった。「無料でこれだけの支援を受けることができたのは、たいへん有り難い」というのが、偽らざる感想である。そして、学生の目から見れば、単に授業の手法としてＷＳが取り入れられているだけでなく、授業そのものがＷＳと多分に共通する要素をもつ手法により支えられているとの実感をもつことができ、それが、人間関係の構築という授業目的の達成につながったことは疑いない。

授業参観は、カリスマ教員の模範授業ではないし、問題教員の矯正策でもない、ごく普通のことである。授業改善という終わりのない目標に向けて、信頼関係に基づく前向きの人間関係が広がりそして強まっていくことを期待する。

科目名：生命の不思議 *授業形態：主題別セミナー*
担当教員：日詰雅博(教育学部)
受講者数：８名

新規授業科目として後学期に生命の不思議　分子生物学セミナーを開講した。受講生には 8 名が登録し，6 名が継続的に出席したが，2 名は現れなかった。

教育目標

分子生物学に関わるノーベル賞受賞者がどのような研究業績により受賞したのかを勉強し，明らかにした結果だけでなく，どのようにして発見したかという解明する面白さを理解すること。また，個人あるいはグループで調べ学習を行い，理解した内容をまとめて発表し，内容を聞いているものに理解させる力を身につけることが目標であった。

設定したレベル

与えられた資料を読みこなし，更に図書館などで文献を調べて，十分理解し，分かりやすく発表して，聞いているものに理解させる。質問に分かりやすく答えることのできるレベルを期待した。

授業するにあたって特に留意した点

内容の理解が難しすぎるものや，簡単すぎる内容は省き，適当な内容を選定した。少人数であったので，一人でやる場合と，2 人組で発表する場を設け，グループは集まりやすそうなグループを作った。発表方法は最初はパワーポイントを予定していたが，小人数なのでプリント，OHP,パワーポイントなど何でも良いことにした。

学生の反応

シラバスの内容が学生の興味を引かなかったのか，難しすぎると思われたのかは分からないが，受講生が予定より極端に少なかった。しかし，受講した学生は，少なかったせいもあり真面目にほぼ全出席であった。また，それぞれ自分の分担のところは責任をもって発表してくれた。しかしながら，準備にかける時間が少ないようで，手がかりとして渡した資料を読むのが精一杯で，それから発展させて調べているとは思えないものが多かった。聞いている学生から質問が出ても答えることが出来ず，理解は少し物足りないものであった。発表者のなかには，理解が不十分なまま発表し，聞く側も十分な理解が出来ていないこともあった。しかし，学生の中には，分かりやすいように前置きを調べて準備してきたものや，パワーポイントを使って熱心に発表したものもいた。

総合的に見てうまくいったかどうか

自然科学の内容を調べてもらって発表し，質問を受けるという形式で行なった。自然科学の内容は真実であることなので，分からないことを質問し，それに応答するに留まり，

議論にはならなかった。少人数で双方向の授業をめざすテーマとしては不適当であることが分かった。総合的に見て成功したとは思えない。

今後に向けた改善点
　今回取り上げた分子生物学に関わるノーベル賞受賞者の業績についての内容は，手に入りやすい文献も少なく，内容的にも難しすぎたようである。このまま次回実施するのには無理があると考えられる。また，自然科学の事象は正しいことなので議論の対象にはならず，議論をさせることを目指すのであれば，不適当と考えられた。自然科学の領域で双方向の講義をするのであれば，自然科学が引き起こす倫理的な問題のような学生が自分で判断して議論に参加できるような内容が適当であると思われる。
愛媛大学に学生に学ばせたい教養テーマ
　テレビや新聞などのマスコミに登場する自然科学の記事を理解し，判断できる力を身につけさせたい。

科目名：生命の不思議　　*授業形態：主題別セミナー*
担当教員：小林直人(医学部)
受講者数：２７名

1．　授業題目　ヒトの骨「百物語」
　　第４部会：自然を知る、科目名：生命の不思議
　　（少人数学生参加型授業・主題別セミナー）
2．　履修者数　22 名（単位取得者数）；（平成 15 年度の同じ授業では 16 名）

3．　重視した教育目的
　共通教育の科目、特に「主題別科目」には明確な教育目的が示されておらず、担当する教員がそれぞれ戸惑いながら授業をしているのが現状である。
　この授業の設計に当たって私は、自分の授業の目的を以下のように設定した：
　　★“知識の伝授”は主たる目的としない。
　　☆“知識を得ることの喜び”を実感できる場の提供を授業の目的とする。
　　☆“自ら考える”経験の場を提供することを授業の理想とする。
これは、共通教育全般に通じることと考えており、今後の共通教育のカリキュラムを考える上での一つのたたき台として提案させていただきたい。学生が専門教育課程で専攻する内容は様々であり、その全てに直接関係する知識が果たしてあるのか疑問であり、全学生共通の“教養教育”を目指すなら知識伝授を目標とする授業ではその目的にそぐわない。むしろ、特に１年次の学生にとっては“知的な喜び”を体験することこそが、その後の学習への動機付けになるのではないだろうか。
　そのため、授業にグループワークを取り入れることを計画し、また新機軸授業として登録してクラスサイズを小さくさせていただいた（定員は 30～40 名、とシラバスに明記）。いわゆる“理系”科目ではグループワークは導入しにくいという意見もあるが、小グループのメンバーで協力して課題を解く、というプロセスを授業に取り入れることを試みたつもりである。

4．　設定した到達レベル
　この授業のテーマを一言で言えば、「形態と機能とが不可分であること」である。そして、そのような例をヒトの体（特に骨学）を通して学び、さらに自ら実近にある例を考えることが到達目標である。上述の授業の目的から、獲得された知識を問う筆記試験は行わない。その代わり、“自ら考えた”ことの評価のためにレポートを書いてもらった。

教育の成果はその前後の学習者の「変化」によってのみ測定できるという。この授業の到達レベルは「学習者のモノの見方が変わる（形態を機能を結びつける、機能を前提にして形態を見る）」ということになる。これは非常に成績評価しにくいが、レポートに取り上げた具体例のオリジナリティ等は評価の対象になると思われる。

5．　特に留意した事柄

◎**テーマ**は自分の得意とする内容から選定する。

学習者が入学間もない１年生で学部もまちまち、という条件の授業をする上で、内容が分かりやすくかつ教える側としても知識の量と質に自信があるということを重視したが、研究の専門の中から選ぶことには固執しなかった。私の研究の専門はミクロのレベルの細胞生物学であるが、専門教育ではまったく別の分野の肉眼解剖を担当し、毎年およそ 200 時間を解剖実習室で学生とともに解剖を行っている。その中で、「骨」は共通教育を担当するようになるよりも前から自分なりに温めていたテーマであった。

3.と 9.にも書いたが、全学レベルでの“教養教育”の場合、授業のテーマそのものは何でも良いはずである。より重要なことは、扱うテーマが具体的で学生にもイメージしやすい実近なものである（と思われる）こと、さらに、テーマに則した実例の中からより一般的なテーゼが導き出せること、であると私は考える。今回の授業の場合、テーマは「ヒトの骨（の形態と機能）」「ヒトと他の動物との比較」であり、その中から「形態と機能は不可分である」という一般的なテーゼを見いだすことができる。

◎詳細な**シラバス**を作る。

愛媛大学教育ワークショップの企画に参加させていただき、愛媛大学ＦＤハンドブック「もっと！授業を良くする」の章も書かせていただいたので、シラバスの重要性は良く認識しているつもりである。結果として共通教育の科目の中でも最も長いシラバスの一つになっているようだ。シラバスは初回平成 15 年度のために丁寧に作成したので完成度は高いと考えており、平成 16・17 年度と毎年若干の変更を加えながら繰り返し使っている。

◎授業資料（**パケット**）を学期当初に配布する。

作成したパケットは約 50 ページ。ただし授業中にメモを取るスペースも含めているため白紙に近いページも多い。学生からは「手作りの教科書」とも認識されているようであり評判はよい。パケットは学期当初に授業の内容を紹介する上でも役立つ。

◎１回の授業で扱う**キーワード**を極力少なくする。

大半の授業ではキーワードは一つである。具体的には、１回の授業ではなるべく一つの骨あるいは一つの関節に着目するよう心がけた。

◎学生との**コミュニケーション**を密にする。

ただし、必ずしも口頭でのコミュニケーションにはこだわっていない。実際には、授業毎に最低でも 15 分書けて小レポート（Ａ４で１枚）を書いてもらい、それに朱を入れて次の授業で返却した。また、良く書けた小レポートのコピーを受講生に配付した。特に、その回の授業で分からなかったことや関連する質問をなるべく小レポートに書いてもらい、それに対して一言づつコメントした。学生の感想を読む限り、小レポートは学生にとってはその日の授業を振り返って知識を整理し、分からないことはその場で（書くことで）質問できる、という点で良かったようである。教員にとっては、その回の自分の授業（講義だけではない）を学生がどれだけ理解したかしなかったかが手に取るように分かり、次回の授業の設計に役立つ。授業中にも学生が質問・発言しやすい雰囲気を作れないことは私の力不足によるが、それを補うためにも“書く”ことによるコミュニケーションは有効であった。また、最後の授業の内容には学生のリクエストを受け付けている。

私の授業の場合にはクラスサイズが小さいためほとんど負担感は感じていないが、100 名を超える授業では教える側も負担が大きくレポートを返却するのにも手間がかかる。その場合には、“良く書けた小レポート”を選んで印刷し配布する、などの工夫が必要であろう。

6．　学生の反応

学生からは「分かりやすい」「興味がわく」「今まで考えてもみなかった内容

でおもしろい」「質問しやすい」「モノの見方が変わった」「言葉で表現することの難しさを実感した」等、肯定的なコメントをもらっている。

この授業は平成 15 年度から始めているが、学生アンケート（平成 15 年度後学期授業改善のための最終アンケート）の結果では、回答者数が 13 名と少ないながらも「**授業満足度**」について回答者全員が「強い肯定」という非常に高い評価を受けた。今学期の中間アンケートでも授業のスキルについて「教員の話し方・説明の仕方」が 3.9（４点満点）、「教材等の使い方」が 3.8、「進度と時間配分」「授業内容・レベル」が 3.7（回答者数 20 名）。改善の必要性は多々感じているが、学生には高い評価を得ていると考えている。

7.　総合的な自己評価

シラバスやパケットの準備、毎週の小レポートの添削など授業にかけているエネルギーの分、学生も“知識を得ることの喜び”を体験できている、と自分では感じている。ただし、これは単にクラスサイズが小さいことが主要な原因かも知れない。適切な評価のためには**ピア・レビュー**（同僚評価）が必要であろう。

8.　今後に向けた改善点

グループワークをもっと活性化すること。授業中の学生の発言は当初期待していたほど活発ではないし、グループワークも“みんなでワイワイ考える”というレベルには遠い。平成 15 年度にグループワークが思ったほど好調でなかったため、平成 16 年度には担当者が黒板を使って発表する形式を取り入れたが、グループワークもプレゼンテーションも中途半端になっている。他の授業でのグループワークを見学させていただいたので、次年度はまずグループを作り、グループ単位でアイスブレーキングをした後で授業に入ろうと考えている。授業の改善には**他の授業に実際に参加**してみることが必須であると考える。

9.　学生に学ばせたい教養テーマ

3.に書いた「☆」の内容に尽きる。逆に、「授業テーマ」やそこで扱われる「具体例」は“何でも良い”し、必ずしも最先端のことである必要はないと考えている。

週間エコノミスト（毎日新聞社）２月８日号で北村勝朗氏（東北大学・教育学）は学校教育における「本質的なおもしろさ」に触れる体験の必要性を説いている。このことは大学における教養教育でも全く同じであると私は考える。

科目名：生命の不思議　　*業形態：主題別セミナー*
担当教員：澄田道博(医学部)
受講者数：３３名

授業題目：ヒトの生活と生物・環境

重視した教育目的：病気を予防し、健康な生活を送るために、化学合成分子や種々の生物が産生する生命に必須で作用の強い分子などが、我々とどのように 関わっているかをより良く理解することを目的とした。また、必要な知識や詳細な関連資料を独自で学習できるよう、テーマに関連したキーワードによるインターネット検索等の練習を行った。

設定した到達レベル：学生が課題を選択し、予習して報告、発表する形式としたが、各学生の担当項目については、関心も高く、よく勉強して理解も深まったといえる。しかし、他の学生の発表時には、自らの興味と異なるためにより受け身となることが多く、課題に集中し難く、幅広い学習が不十分であった。

授業を進めるにあたって特に留意した事柄：学生の興味を惹くよう DVD 動画映像資料を主にし、ドキュメンタリーや実験操作、アニメなどの理解し易い映像を選んだ。また、必要に応じて自力で学習できるようにインターネットの活用を重視した。

学生の反応：関心のあるテーマについて学生が課題を選択して、発表や報告を担当する形式としたため、担当項目では各学生の反応も良く、積極的であった。しかし、他の学生のテーマについては、聞いているだけにとどまることが多くみられた。より興味を高め、積極的に学習させる必要を感じたので、映像の視聴時には、内容の要約を書き取らせて提出するようにした。

総合的にみてうまくいったかどうか：初期に設定した、学生の関心を高めること、および、自ら学習する方法や技術を修得する目的は、かなり上手くいった。映像の視聴や、インターネットの検索は関心も高く、充分効果的であったが、課題をより深く学習させることは、より工夫が必要と感じた。

今後に向けた改善点：発表担当のテーマについては関心も高く、学習効果もあがったと評価できるが、その他の話題に対して如何に積極的で自主的な学習をするかが課題である。改善法として、各テーマについて要点を書き出し、キーワードをインターネット検索してレポート提出したり、またそのテーマについてクラス討論などの時間を作って、より深く検討を加えることが必要である。この意味では、２コマ連続の時間などが望まれる。また、資料検索の幅を広げる目的では、英語のキーワードによる世界レベルでの検索を行えるよう、英語の能力を養う必要を感じる。また、レポートの書き方など、ワープロや e-mail による原稿作成などの練習も共通教育の課題として加えるとよい。

愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ：
（１）病気を防ぎより健康を強化することは、大学生活やそれ以降の人生で、自らの目的を達成できるためにも必須の課題である。この意味では、共通教育の課題として、生物、生命の基本的な仕組みや環境の影響、食物や医薬品の作用点や効果などを、より身近な課題で講議に取り入れる。例として、「スポーツの試合に勝てる体力は、どのような栄養や代謝により養えるか」「老化を防ぎ、健康美を培うためにはどのような栄養、代謝が重要か、避けるべき嗜好品は何か、またなぜか」。
（２）「今後に向けた改善点」でも述べたように、○報告書の作成の仕方（医学実習では、実験結果のレポートを作成する時に、基本様式を説明している。）、○メールなどの基本的な通信文書、依頼文書などの言葉使いや、様式を指導する。ワープロの利用なども必要である。　○海外のホームページを資料として検索できるように、実用レベルの英語の学力を養う。

科目名：生活と健康　　*形態：主題別セミナー*
担当教員：乗松貞子(医学部)
受講者数：２９名

重視した教育目的
○ 学生が、健康にとって生活習慣がいかに重要かを再認識でき、自分の生活改善への動機づけとすることができる。
○グループワークを通じ、自ら積極的に学習に参加する態度を養うことができる。
設定した到達レベル

○　健康と生活習慣の関係について理解できる。
○　主な生活習慣病について論述できる。
○　生活習慣病予防のための健康な日常生活方法について論述できる。
○　自己の生活を健康的に調整できる。
○　グループ学習での自己の役割を果たすことができる。

授業を進めるにあたって特に留意した事柄

○　学習者主体
○　グループダイナミクスの活用
○　他学部学生との交流
○　学生一人一人が発言しやすい雰囲気作り
○　教員に質問をしやすい雰囲気づくり・・・少人数制であるので教員は学生の氏名を早く、覚えるよう努力した。

授業ガイダンスで講義の目的を強調して説明。特に学習者主体の学習であることを強調した。グループワーク中心の講義であり、欠席が他者に影響を及ぼす事を強調した。グループは、同じ学部の学生が一緒にならないように編成し、まずメンバー個々人の理解のために、絵己紹介（お互いの第一印象を絵で表現しあう）や教育ゲーム（意思決定ゲーム）を行った。グループの名前を学生たちで自由に決めてもらった。

グループワークについてのオリエンテーションも入念に行った。グループワークは２段階で実施し、一段階目の課題は教員が示した。二段階目は、一段階目の課題を深めるかたちで、学生たち自らが課題を決定し、まとめていった。

課題についてのまとめは、グループ毎に、全体発表した（全体発表２回実施）。

毎回、講義の最後にグループワークの内容および次回までに準備してくることや次回取り組む内容についてグループ毎に発表し、他のグループワークの状況も把握させるようにした。

学生の反応

○　欠席者はほとんどいなかった。
○　生活習慣病について自分たちで調べていくにつれて、これまでに知らなかった知識を確認でき興味深く学んでいた。
○　次回の講義までに各自が調べてくることなどを決め、事前学習してきていた。
○　グループワークは回を重ねるにつれメンバーの交流が深まり、楽しそうであった。

総合的にみてうまくいったかどうか

○　試験はレポートにしたが、これまでの自己の生活習慣の改善点がそれぞれ具体的にまとめられ、講義の目的は達成できたと思う。
○　グループは６編成としたが、非常に協力できたグループと、協力できないグループができてしまった。そのため、個人では学習できていたが、不全感をもった学生がいたことは残念であった。新１年生の場合は取り組みが非常に熱心であるが、数名の上級生がグループに入ると、グループダイナミクスが働きにくかった。

今後に向けた改善点

○　グループ編成を教員が行うのではなく、グループ編成の時点から学生が主体で実施する。学生間の連絡調整は、同学部の学生を一緒のグループにした方がスムーズかもしれない。
○　グループワークにおいて、グループディスカッションを活発化するための教員の介入方法の工夫
○　図書館における、文献学習時間を設ける（今回は主にインターネットで文献を集めていた）。

○ 発表、媒体（今回はＯＨＰ使用）の工夫・・・・前期はまだパソコンの使用レベルがまちまちである。

愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ（現在設定されている科目でほぼ網羅されていると思いますが）

○ 死生観

科目名：日本の地域性 *授業形態：主題別セミナー*
担当教員：藤目節夫(地域創生研究センター)
受講者数：２６名

授業題目：まちづくりについて考える

重視した教育目的：

経済のみでなく、地域の歴史・文化を活かしたまちづくりの重要性、そしてそれは住民と行政の協働によりなされなければならないこと、等を座学だけでなく実際のフィールドワークから学ばせる。

設定した到達レベル：

（１）まちづくりは地域の個性（地域の文化・歴史）を活かしてなされる必要性を理解する。

（２）まちづくりは行政のみでは不可能で、住民との協働でなされる必要性を理解する。

（３）まちづくりは誇れる地域を自らが創る行為であることを理解する。

特に留意した事柄：

知識を一方的に与えるのではなく、現実のまちづくりの課題を提示して考えさせることに力点を置いた授業を実施した。その際、実際に現地（内子町）に出向き、地元でまちづくりに日夜励んでいる人々の体験談を聞かせて、より深く、より現実的にまちづくりを考えられるような配慮を行った。

学生の反応：

学生にとり、フィールドワークを伴う共通教育が少ないこともあるのか、多くの学生が強い興味を示した。ただ、一部の学生はあまり関心を示さず、むしろフィールドワークを伴う講義は負担が大きいと感じている様子であった。

総合的評価：

まちづくりという地域に根ざしたテーマは、地域に出かけて学ばすべきであると考えてこの講義を実施したが、概ね当初の目的は達成されたと思われる。

今後の改善点：

今回は初回でもあり、まちづくりの現地へ出かけて考えさせる方式を採用したが、今後は具体的なテーマを与えて現地で調査をさせてそれを報告するやり方も検討する必要があるように思われた。このような方式なら、前述のやる気のない学生の態度も変わるのではないかと期待される。

学生に学ばせたい教養テーマ：

住民と行政の協働のまちづくり

科目名：外国の文化 *授業形態：主題別セミナー*
担当教員：望月佳重子(法文学部)
受講者数：３０名

ワークショップ（学生のグループ・ワーク）：運営スキルを求めて

はじめに
以下は１事例の紹介で、要点はワークショップ活性法です。授業の全体像については、次号『教育実践ジャーナル』に記す予定です。

科目名　「外国の文化」　Ｈ１６後学期　　月曜２限　　講２３室
受講生数（２５）：法文（１２）、教育（３）、工（９）、医（１）

Q: 準備段階での工夫は？
A:　１．簡潔なシラバス記述　　２．議論しながらの読解に耐える、力強いテキストの選択　　３．背景説明のためのハンドアウトづくり

Q: ワークショップの構成員を固定したか？
A:　（１）グループの作業がしっくり行きだしたので、学期間中、５班に分けて固定した。
（２）状況によっては、課題を変えるときなど、途中でグループを組み換えることもできるだろう。

Q: リーダー役は？
A:　（１）自然発生的に決まった。
（２）　リーダー・ロールもローテーションしてゆくよう要請した。「ボス役、廻してますから、先生、心配しないで」との返事。

Q:　グループや個々の学生の座る場所を固定したか？
A:　（１）やや強権的だが、シートマップを配って、固定した。（マップを付録として貼付）
（２）欠席しにくいし、グループ内での議論とワークにもプラスの影響。学期半ばころには、あいさつを互いにきちんとするようになった。
（３）流動性を欠くという問題がある。だが、学生も教員も安心するし、なにより名前を良く覚える。
Q:　各グループに出した課題は？
A:　（１）プリゼンテーションを控えた班：「舞台」づくり、直前リハーサル
（２）その他の班：テキスト読解、朗読練習
プリゼンテーション準備（主題の議論とハンドアウトのデザイン）
（３）「徘徊」教員への情け深い「ご祝儀」質問づくり

Q:　プリゼンテーションの最中、教員は声をかけたか？
A:　１．もう少し大きい声で！　２．どうぞ、もっとゆっくり！
３．きれいな朗読！　４．ハンドアウトのどこを見たらいい？

Q:　プリゼンテーションの後は？
A:　（１）出演グループ：想定質問づくり、疲れたから「ぼんやり休む」行為
（２）その他の班：議論、質問の整理、質問者の指名
（３）質疑応答：プリゼンテーション班と、その他の班との間で行う。
（４）教員は、たまに、長い質問を整理して繰り返す、補助役。

Q:　ワークショップを盛り上げる、その他の工夫は？
A:　１．ワークショップ経験者の活用（ゼミ生チューター）　２．ほめて励ます。
３．授業後のフォロー（ゼミ生インフォーマント）　４．授業後の交流（非ゼミ生に対して）　５．教員自身が学んで楽しむ。　６．言葉の美しさが実感できる朗読（学生と教員とによる）　７．授業公開とビデオ撮影を学生が喜んで受け容れる。

科目名：芸術の世界　　*授業形態：主題別セミナー*
担当教員：松久勝利（教育開発センター）
受講者数：２６名

平成１６年度前学期に担当した新機軸科目、「芸術の世界」について以下のように報告いたします。

Ⅰ 授業題目　　眼差しの共有ーワンランク上の美術理解のためにー
Ⅱ 履修者数　　２２名
Ⅲ 重視した教育目的
学生が、美術作品という客体化された「こころのかたち」へのアプローチを介して、自らの「感性を育む」ための具体的な方法を知り、実践できる。
Ⅳ 設定した到達レベル
①画面に即した絵画理解の導入的技法の意味を知り、実践できる。
②協同して事にあたることを通じて、社会的技法を身に付ける。
③問題を見つけ、その解決に向けた調査、分析、討論、まとめ、プレゼンテーション、レポート作成法等、基本的なスタディスキルの導入段階に対応できる。
Ⅴ 授業を進めるにあたって留意した事柄
①答が一律ではない問題へのアプローチすることの楽しさを経験してもらう。
②社会的技法が育っていない段階なので、いかに円滑に協同学習に入ってもらうかが課題であった。
③「感性」に関わる授業の評価法を開発するため、学生による自己評価と相互評価の運用テストに取り組んだ。
Ⅵ 学生の反応（上記Ⅴに即して）
①についてはおおむね良好な反応であった。絵画鑑賞というきわめてパーソナルな作業が、はじめから一人ひとり異なるものであることを学生は承知しており、それにもかかわらず他者や他のグループの理解の違いに、目から鱗が落ちる、といった反応がみられた。
②グループにより活動の活性度が異なり、不活発なグループへの対応に苦慮した。しかし不活発なグループでも、上記①の反応を契機として、個々の学生になんとかしようとする努力が見られ始め、最終的には活発なグループの８０％程度には到達できており、まずまずの結果と言える。
③学生による成績評価の問題点は、個人により甘すぎたり、厳しすぎたりというムラが生じる点にある。これに対しては、教員による評価も並行して行い、これをズレの大きい学生に示し、グループの中で評価のズレについて話し合ってもらった。これにより自分とまじめに向き合うことができたとする反応もあり、教育上も効果的と思われるので、今後も引き続き試みるつもりである。
Ⅶ 総合的に見て、うまくいったかどうか
反省点は多々あるが、学生の授業評価は 4 点中 3.15 といったところで、とりあえず

落第点はとらずにすんだ。それにしても授業というものは難しい。

Ⅷ 今後に向けた改善点

・グループワークの活性度を高いレベルにもっていくための工夫が必要

・学生による自己採点の信頼度を高めるための工夫

・自己採点に意外に手間取ることから、時間配分が乱れがちになる。毎回の採点より３回に一度くらいのペースの方がよいか

・時間外学習の設計

科目名：大地を活かす *授業形態：主題別プロジェクト学習*

担当教員： 水谷房雄（農学部）

受講者数：３０名

授業題目：農に親しむ

重視した教育目的：農業は単に食糧生産に重要な役割を果たしているばかりでなく、近年、特に保水機能、災害防止、景観保全といった農場の持つ多面的機能が注目を集めている。国民生活にとって大変重要な位置を占めている農業について、普段の生活においてはあまりなじみのない農学部以外の学生を対象として、土や作物や家畜に触れ、農業を通じてどのように人間が自然を利活用しているかを肌身をもって体験することを重視した。

設定した到達レベル：手足を使って土に触り、作物や牛に触って、農業の持つ機能の多様性などを身をもって体験すること。

授業を進めるに当たって特に留意したこと：教室内での説明よりも、野外での実習に時間を割き、力を入れた。

学生の反応：農学部以外の学生を対象としているため、初めて農作業を体験する学生も多く、農学部の学生に比べて授業に取り組む姿勢や眼の色がちがう感じがした。授業の最後に書かせた感想文でも、良い体験ができたという意見が多く寄せられた。

総合的所見：本授業は農学部以外の学生を対象に行う体験型教養教育科目として、受講希望者も多く、今後とも継続して行く価値があると考える。

今後に向けた改善点：夏期休業中の２泊３日の宿泊集中授業なので、夕食後の時間の有効利用ができないか検討したい。

科目名：資源を活かす　　*授業形態：主題別プロジェクト学習*
担当教員：藤原三夫、大田伊久雄、小林修（農学部）
受講者数：４０名

授業題目：日本の森から世界の森へ

重視した教育目的：
　農学部附属演習林における野外活動を通して、実際に森林に触れることを第一の目的とした。すなわち、森林には、地球環境改善機能，地球環境保全機能，地域環境保全・改善機能，人間性回復機能などの様々なはたらきがあるが、森林内の踏査や作業を通して、そうした機能の一端を体験的に知ることができるからである。
　さらに、夕方から夜にかけての勉強会では、講義および課題研究を行い、日本と世界における森林資源・森林環境問題に関する視野を広げることを第二の目的とした。課題研究では、５つのグループに分かれ、討論を通してそれぞれの課題に対する自分たちの意見を集約するという作業を行い、最終日の報告会では研究成果の相互評価をおこなった。

設定した到達レベル：
　森林内に入って身体を動かす中で、今まで気づかなかった何かを発見することができればよい。さらに、講義と課題研究を通して、自分なりの森林観というものを形成することができれば、さらによい。また、この講義で始めて出会う仲間と、議論を通して一つの主張を形成する作業ができることも重要な点である。

授業を進めるにあたって特に留意した事柄：
　森林内での実習を重視した２泊３日の集中講義なので、作業中の事故や体調管理には注意が必要であった。特に、初日に台風 16 号の直撃を受けたため、予定していたコースの森林踏査ができず、雨の中を林道沿いに歩くこととなった。幸い、怪我や病気になる学生はいなかった。
　授業内容としては、限られた時間の枠内で、森林での実体験と講義で教える国内外の森林問題との接点を見いだすことが難しかった。森林科学実習などに来る農学部の学生と違って、ほとんど森林に関する知識のない学生が多いため、森林問題の初歩的なところから相当専門的な範疇まで話すことによって、どの程度まで理解が及ぶかに留意する必要があった。

学生の反応
　予定通りの作業ができなかったことには不満もあったが、台風の風の強さと２時間に及ぶ停電という貴重な経験ができたことは予想外の収穫であったようだ。翌日、台風の去った森林内を踏査したときには、倒れかかった樹木や散乱した枝などを珍しそうに見ている者が多かった。山歩きそのものをほとんど経験したことがない学生もいた。
　課題研究は、「木は伐ってもよいのか」という質問に対し５通りの回答を用意した上で、５グループがそれぞれの主張を裏付ける合理的根拠を模索するというものであったが、多くの学生がこれまで全く知らなかったような考え方があることに驚きを持ったようだ。資源環境問題の奥の深さの一端を感じ取ることができた者もいたのではないだろうか。

総合的にみてうまくいったかどうか：
　台風によって森林体験が十分行えなかったことは残念であった。反面、講義と課題研究に時間を割けたので、そちらの方の密度は濃かった。総合的には、まずまず学生にとっては意味のあった授業ができたのではないかと感じている。

今後の課題：
　台風のような非常事態の場合は仕方がないが、通常の雨であればどの程度まで森林での作業を行うのか、できない場合にはどうするのか、また、講義と課題研究の時間配分など、さらに検討すべき点がいくつか発見された。徐々に改善していきたい。

科目名：ストレスと健康　　*授業形態：主題別プロジェクト学習*
担当教員：野本ひさ（医学部）
受講者数：４４名

平成16年度前学期　305　ストレスと健康「いま，“家族の力”について考える」

授業概要：

本授業は，フィールドワーク型授業として企画し，実施した。授業のテーマを現代家族におき，学生それぞれの興味・関心に応じた問題を発見することを授業全体の目標とした。その問題解決過程の中で，次のスタディスキルを身に付けることを行動目標とした。

授業のねらい（身に付けてほしいスタディスキル）

- □　身近にある問題（家族）に関する様々な事象を見つめる
- □　問題意識を明確にし，人に伝えるための材料を調える
- □　問題を解決するための学習スキルを知り，体験する
- □　様々な学習スキルを使い，問題を解決していく
- □　共同作業を行うためのコミュニケーション能力を駆使する
- □　共同作業を行うためのリーダーシップ・メンバーシップを発揮できる
- □　自己評価を通して，自己の学習プロセスを確認する
- □　相互評価を通して，仲間や，集団の中の自己を知る
- □　社会（フィールド）に出るための態度やマナーを身に付ける
- □　フィールドとの連絡・調整や調査に関する倫理的配慮について考える
- □　自分の理解をコミュニケーションや発表によって自己点検できる
- □　自分の理解を人に伝えることができる
- □　授業に参加するための自己管理，健康管理について意識する

授業の進め方

授業全体を，「問題を探す」，「テーマを決める」，「フィールドワークの実施」の３つのセメスタに分け，図１のフローチャートのように展開した。授業の前半では，グループワークと個別学習を交互に取り入れ，個別に学習したことをグループでまとめ，発表するプロセスを２回行った。その中で，グループワークの方法や，資料のまとめ方，発表の仕方を随時指導し，最後のフィールドワークの発表に向けてスキルを向上させるようねらった。毎回の授業終了時に，ふり返りシートを用い，本日の学習成果の確認や，自己成長の確認，授業内容に関する疑問点，及び授業評価などを記入してもらうようにした。

フィールドワーク

授業の中盤までにそれぞれが絞り込んだテーマに応じたグループを作成し，フィールドワークを実施した。自分達の抱いている問題を解決するためのフィールドを学生自身が特定し，教員のサポートを受けながら見学の依頼，交渉を行った上で実施した。本年度，学生がお世話になったフィールドは，「松山児童相談所」，「松山家庭裁判所」，「愛媛県警少年課」，「松山市社会福祉協議会」，「愛媛大学職員」，「NPO 子育てネットこねっと」の６箇所である。このフィールドワークで得た成果を，グループでまとめ，発表した。

評価

評価基準は，毎時間の学習評価チェックリストの提出 30 点，グループワークへの参加状況に関する相互評価（ピア評価）10 点，授業への積極的な参加（加点・減点方式）10 点，大学生として好ましい態度（減点方式）10 点，個人課題の提出 10 点，グループ作業の発表内容 30 点として採点した。評価結果は，優 40 名，良３名，評価しない１名（２回生以上留学生）であった。

本授業の振り返り

従来型の学習は，教員が行う講義を聞き，メモを取り，授業の後の自由時間を利用して図書館にある書籍・文献などをもとに自己学習する形式であった。本授業の特徴は問題解決に必要な学習スキルを授業を通して身につけることにあり，学習スキルを使う体験を最終目標としている。つまりこれは，問題基盤型学習（problem-based learning:PBL）であり，学生は，●問題解決のためのスキルを磨き，豊富な情報を集積できる，●グループダイナミクスを活用した人間関係スキルが身につく，●生涯学習・自己成長に役立てることがで

きるなどの成果を得る。授業終了後のレポートの内容には，「自分でテーマを決め，自分で解決していくことが楽しかった。」，「テーマを決めるときのＫＪ法は，他の授業でも役に立った。」，「最初はグループワークが苦手だと思ったが，同じテーマを追究するうちに人の意見を聞いたり，自分の意見を言えるようになった。」，「興味本位でとりかかったテーマだったが，調べていくうちに様々な視点で考えられるようになった。」，「調査を依頼するときに，自分本位ではない緻密な気配りが必要なことがわかり，自分が成長したように感じた。」など，授業の目標達成を示す記述が多くみられ，本授業の成果と考える。

授業全体を振り返ると，図書館の利用やインターネットの活用については振り返りシートに当日の学習項目を記入することで到達目標明確にできたと考える。グループワークの方法を修得する時には，グループ活動への参加度を自分，グループメンバーの双方について記入する振り返り方法を活用し，自己洞察を深めた。全体の中で発表に関するスキルを修得する時間が少なく，不消化に感じたので，今後の課題としたい。また，学生が決めたフィールドに授業の目的・目標を伝えたり，日程を調整したり，公文書による協力依頼を行うことを短時間で行わなければならず，かなりの労力を要したが，あらかじめ用意された学習課題に取り組むよりも，学生の自主性を尊重でき，また，これらのプロセスと学生と共有できたことによる学びは大きかったと考えている。

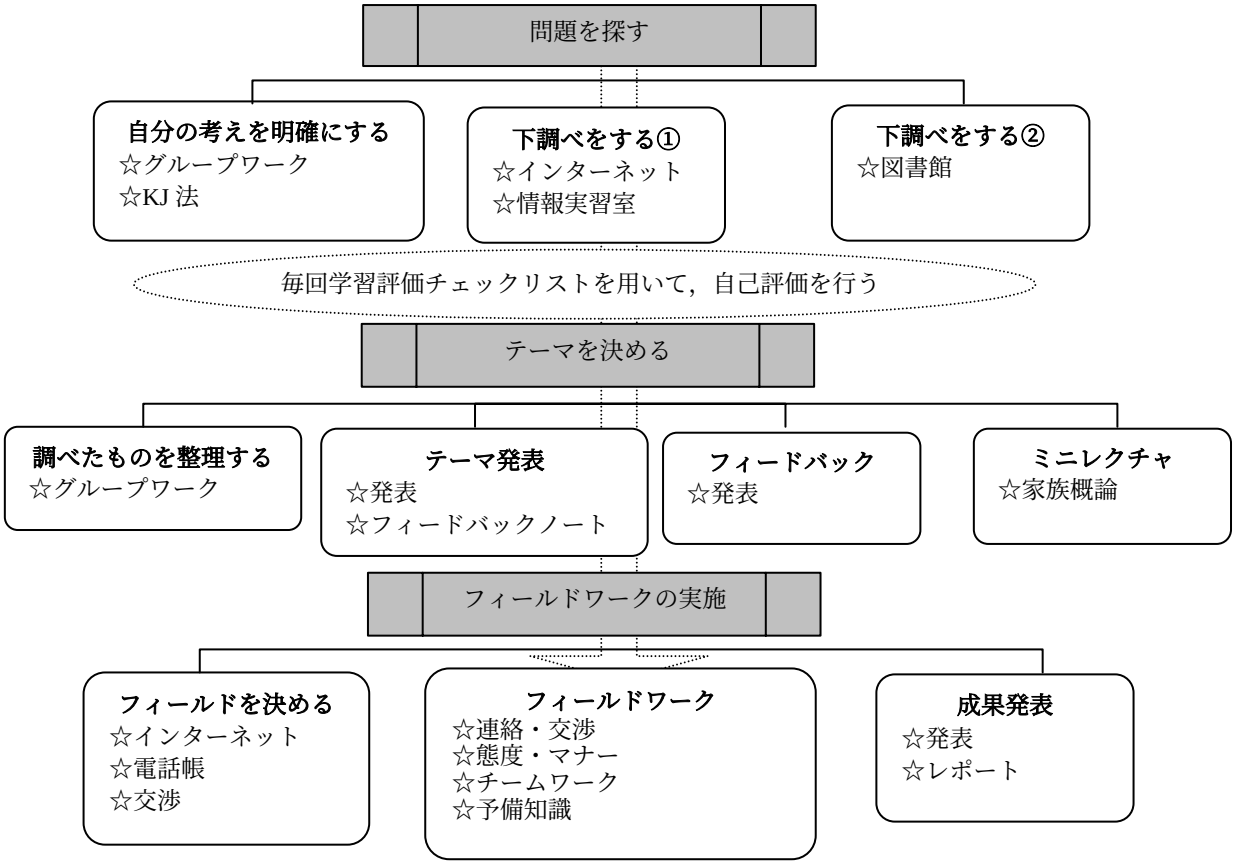

図１フィールドワーク授業　フローチャート

科目名：自然に親しむ　　*授業形態：主題別プロジェクト学習*
担当教員：中川祐治（総合情報メディアセンター）
受講者数：１７名

【授業題目】自然に親しむ（ネイチャーゲーム）
【履修者数】１１名（１４名募集、３名キャンセル）
【重視した教育目的】
環境教育の一分野である自然認識学の立場から、五感を使って自然を直接体験することで自然を共に分かち合うことを学ぶ。
【設定した到達レベル】
ネイチャーゲームの理論を学び、複数のアクティビティを経験することでネイチャーゲームの基本理念を理解し、さらに新しいアクティビティを創作する。
【授業を進めるにあたって特に留意した事柄】
- 早朝から夜間にわたって長時間野外活動を行うので、怪我や事故が起きないように留意した。
- 大洲青年の家のフィールドをフルに使うためフィールド調査を含めた事前準備を綿密の行い、朝６時から夜１０時にわたる３日間のスケジューリングを移動時間やアクティビティの準備時間を含めて行った。
- アシスタント数が限られているので、準備のために活動が停止しないよう、準備に費やす時間が最小になるようにスケジュールを組んだ。
- 教室での講義と野外活動を交互に行うことで、緊張感を保ちつつネイチャーゲームを体験することができるようにした。
- 実施時期が夏期休暇中であったので、専用のメーリングリストを開設し事務的連絡や参加学生同士の情報交換に利用した。

【学生の反応】（最終日の自由記述アンケートより抜粋）
- 今までと違う見方で自然を見るようになった。
- 思っていた以上に楽しかった。
- 朝早くて遅くまでネイチャーゲームをやって、しんどかったけど、どのゲームも熱中していて時間がたつのが早かった。
- 結構ハードスケジュールであったと思いますが、コミュニケーションもとれていたし、安全に終えることが出来たのでよかった。
- 自然に対する熱い情熱が伝わってきた。
- 普段できないことができて本当に楽しかった。
- 普段何気なく通り過ぎていることでも、少し目を向けただけで、見えなかった新しい世界が見えてきて、本当に１つ１つのことに感動できた。
- 思っていたよりも何倍も楽しく、思い出に残るものになりました。
- 今までやったことのない体験がたくさんできました。
- こんなに楽しく１日をフルに活用して充実した時間はないほど、良い経験になった。
- 来年も多くの人に参加していただきたいです。
- 自然の中にこんなに自分から入っていったのは初めてでおもしろかった。

【総合的にみてうまくいったかどうか】
最終日にネイチャーゲームの基本理念を理解した上で新しいアクティビティを作り出すという高い目標を設定し、不安はあったものの実施してみると非常に優れたアクティビティを創作する事ができ、学生たちの集中度が非常に高かったことが分かる。また、実施数日前に台風の影響で山道に倒木があったり、川が増水し川でのアクティビティが急遽できなくなり、その場でプログラムの変更を余儀なくされたが T.A.が積極的に動いてくれ臨機応変に対処できた。
【今後に向けた改善点】
学生たちの集中度に依存するが、次回はアクティビティを創作するに留まらず、実際にそれらを実践するまでに持って行きたい。

科目名：雑学のすすめ　　*授業形態：主題別プロジェクト学習*
担当教員：佐藤浩章（教育開発センター）
受講者数：３６名

□授業題目　イベントプランナー養成講座
□重視した教育目的
ビジネスの現場や市民社会で求められる「イベント企画力」を身につけることで、主体的にものごとを企画し、多くの他者を巻き込みながら、「場」を変革できる人間を養成する。
□設定した到達レベル
①コミュニケーション（聴く・話す・尋ねる）のスキルを向上させる。
②会議の場で、建設的な議論、コンセンサス法による意思決定を行うスキルを身につける。
③基礎的なビジネスマナーの知識とスキルを身につける。
④成功するイベントの要素を複数あげることができる。
⑤効果的な広報戦略についての知識とスキルを身につける。
⑥円滑な会場運営に関する知識とスキルを身につける。
□授業を進めるにあたって特に留意した事柄
アイス・ブレイキング
効果的な班編成の仕方
□学生の反応
「共通で一番おもしろかった」
「楽しかったし役に立ったと思います。」
「最後のイベント企画は授業中だけでは時間が足りなくて、授業外でかなり時間をかけたので大変だったが、おもしろい企画ができたのでよかった。今までで一番真剣に受けた授業だった。」
「大変だがおもしろかった」
「パソコンを使わないといけない取組の場合それを考慮して班編成をしてもらいたい」
「内容はよかったがつめこみすぎで、消化不良かなというところがあった。ただし社会で役立ちそうなこと、実践的、学生同士のコミュニケーションという点では他の授業とは段違いでよかった。通年ではどうでしょうか？もっとよいものになると思います。」
「興味深い授業であり自分にとっては新しい発見であった」
「講師の言葉が大学が決めた台詞である場合が多すぎた。他に教室に設置されているビデオカメラが毎回使われていたのは悪いことだと思う。」
「今まで受けた授業の中で一番楽しく、一番今後ためになると思った授業でした。ありがとうございました。」

□総合的にみてうまくいったかどうか
学生の授業アンケートと自己評価から、概ねうまくいったと判断している。
□今後に向けた改善点、
①プライバシーに関する内容についてのオリエンテーション
②効果的な班編成の仕方

科目名：ボランティア活動　　*授業形態：主題別プロジェクト学習*
担当教員：佐藤浩章（教育開発センター）
受講者数：３３名

□授業題目　キャンパス元気プロジェクト

□重視した教育目的

愛媛大学のキャンパスの問題を自ら発見し、調査、実践、プレゼンテーションを行います。そうした作業を通して、学生の視点からキャンパスを元気にする方法を提言します。

□設定した到達レベル

①身近な社会の問題に関心を持つことができる
②学部の異なる者同士協同で意思決定を行い、作業を行うスキルを身につける
③コミュニケーション（聴く・話す）のスキルを向上させる
④問題発見・解決の基本的なスキルを身につける
⑤大学の問題に関わる基本的な知識を身につける

□授業を進めるにあたって特に留意した事柄

アイス・ブレイキング
グループワークのファシリテーション

□学生の反応

「グループ活動がほとんどだったため、多くの人の意見が聞けたのでよかった。」
「自発的に活動ができ、人との話もできてよかった」
「いろいろな人とのコミュニケーションができてよかった」
「他の人とたくさん討論して、一緒に考えて、活動して本当に楽しかったです。」
「グループ活動や討論の時間が多く、とてもやりがいがあり、それを通して仲良くなり、満足のいく授業でした」
「今まで少人数制でプレゼンなどが行われる授業に参加したことがなかったのでよい経験となった」
「自己満足かもしれませんが、この授業を通して人とコミュニケーションしたりプレゼンテーションしたりする能力を身につけることができ成長できたと思います。ありがとうございました。」

□総合的にみてうまくいったかどうか

学生の授業アンケートと自己評価から、概ねうまくいったと判断している。

□今後に向けた改善点、

グループワークの取組状況が、グループによって格差が出た場合の対処方法について考える必要がある。具体的には下記の二つの点について検討したい。
①リーダーへの助言強化
②問題がある学生への個別指導

□愛媛大学の学生に学ばせたい教養テーマ

領域	テーマ	
消費者教育	・金融 ・銀行 ・税金 ・保険	・クーリングオフ ・家計 ・詐欺商法
心と身体の健康	・うつ病 ・統合失調症 ・人間関係	・性病・AIDS ・成人病 ・悩んだとき
環　境	・身近な環境問題 ・地球温暖化 ・ゴミ問題	・身体と環境 ・開発と国際援助
人　権 人　権	・民族差別 ・性差別 ・思想の差別	・障害者差別 ・人権教育

セクシャリティ	・ジェンダー ・セクシュアリティ ・メディアと性 ・性差別	・恋愛 ・結婚と家族 ・多様な性 ・動物の性
生命と死	・生命の誕生 ・生きる目的 ・生命の尊厳	・ホスピスケア ・死と向き合う ・宗教
職業と進路	・適正検査 ・性格検査 ・職業人講演 ・給料	・履歴書 ・労働の現状 ・過労死 ・労働組合
アイデンティティ	・私とは何か ・他者への義務 ・他者とは誰か ・青年期の発達	・人間関係 ・人生の目的 ・孤独と共同体
大学論	・大学とはどのような場所か ・大学での学び ・愛大の歴史	・愛大の現状 ・愛大の課題と将来構想 ・愛媛大学生への期待
愛媛学	・愛媛の文化 ・愛媛の歴史 ・愛媛の風土	・愛媛の文学 ・世界や日本の中の愛媛
生　物		
物　理		
地球科学	・プレートテクトニクス ・大陸・大気・海洋の起源	・大陸移動 ・地震
宇宙科学	・ビッグバン	・宇宙構造
科学技術	・アリストテレス ・ガリレオ	・ベーコン ・ニュートン
生理学	・身体は何でできているか	
経済・財政	・構造改革	
政治・行政	・イデオロギー ・民主主義 ・行政改革 ・世論とメディア ・裁判所	・議会 ・選挙 ・政党 ・市民参加 ・NPO,NGO
国際関係	・国連 ・平和 ・紛争解決 ・国際協力	・国際援助 ・軍事力と核 ・環境問題
法　律		
心　理	・心はどこにあるか ・自己認識 ・行動主義	・ユング ・フロイト ・エリクソン
現代史		
教　育	・教育とは何か ・教えと学び ・効果的な学習	・学力とは何か ・人間が育つということ ・発達
現代社会	・福祉	・高齢者 ・少子化
日本国憲法		